
クリスマスケーキ交響曲

蒼真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスケーキ交響曲

【Zコード】

Z7952Z

【作者名】

蒼真

【あらすじ】

人で賑わう楽しいクリスマス。

そんな中、茜は寒空にいた。

ケーキの販売のためだ。

雪が降つてきそうな寒空が身に凍みる。

茜のクリスマスは一体、どうなってしまうのか・・・？

クリスマスとケーキを絡めたコメディ系の短編です。

他のサイトでもコマーシャルの形
式であります。

(前書き)

クリスマスを記念して短編の小説です。
明るいコメディタッチの小説です。
聖夜に少しでも楽しんでいただければ幸いです。

「寒い・・・」

沢田茜は朝から憂鬱だった。

世間はクリスマス。

今年は週末が聖夜ということもあって、いつも以上に盛り上がりしているような気がしてならない。なのに、なぜ自分だけこんな寒いところにいなくてはならないのだろう？

茜は1ヶ月も前からこの日のために着々と準備していた。

以前から憧れだつた大学の先輩。

サークルの勧誘の場で一目惚れし、その先輩のために一度もしたことがないテニス部に入部した。

先輩にとって良き後輩となるよう努力し、少しずつ距離を縮めた。そのうち先輩からも声をかけられるようになり、これは良い傾向と判断し

クリスマスの1ヶ月前に告白することに決めたのだ。

夏からダイエットし、服装も化粧も気合を入れ、決戦の日備えた。

結果は・・・

同じ大学のサークルの友人たちに「ご愁傷様」と揶揄されるぐらいの見事な振られっぷりであった。

クリスマス前に告白して、今年の聖夜は甘い時間を過ごすはず・・・だったのに。

あえなく玉砕してしまった茜は腹立ちまぎれにクリスマスシーズン

ン限定期の短期アルバイトに応募した。

仕事は「クリスマス商品の製造・販売」。

正直、仕事内容はどうでもよかつたのだ。クリスマスの時期が忙しいのであれば。

仕事内容はどうでもよかつたのだが・・・

まさかクリスマスケーキの即売のため、店頭前といつ寒空に放り出されるとは思わなかつた。

一応ジャンバーを着ることは許可されたが、毛糸の帽子やマフラー、手袋といった防寒グッズは

見た目が悪い、という理由で却下された。

「ケーキ、頑張つて売つてね。あ、まだ店の冷蔵庫に在庫があるから。

沢山売つてくれたら、臨時ボーナス考えてもいいよ。頑張つて。
まあ、この天気じゃ無理かもしねりだけど」

励ましてはいるのか、最初から期待していないのか、わからない店長の台詞。

他のバイトたちは店内で製造の手伝いをしたり、レジや商品の補充をしてはいたりする。

洋菓子店なので、暖房が効いてはいるわけではないが、それでも外ほど寒いわけではない。

なのになぜ自分だけ・・・。

フラれた事も含わせて、自分の情けない運命が呪わしくて仕方ない。

「いらっしゃいまあせえ～・・・

一応仕事なので、客を呼び込む声を出してみるが、体と心、共に冷

え込んでこぬためか声が出ない。

「ちよっと、沢田さん！ もつと大きな声で呼び込みしてくれなきや、売れるものも売れないでしょ！」

店長から容赦のない注意が入る。
しかし、じつ寒くては・・・。

仕事なのだからみんな甘いこと言いつこしてはいけないことはわかっているのだが。

そのときだった。

「こっちらしゃ～いまあ～せえ～・・・」

気合の入らない呼び込み声が茜の耳に入った。やる気のなさは茜といい勝負だ。

誰・・・？

周囲を見渡すと道路を挟んだ向かいの洋菓子店の店員のようだ。あちらは男性。

同じように寒くて声が出なによつたが、その情けない声がおかしくて少しだけ笑ってしまった。

すると、向かいの男性店員がこちらをじっと見てくる。
その眼光には怒りの色。どうやら、茜が笑っていたことに腹がついたらしい。

いけない、いけない・・・仕事に集中しなきゃ・・・

自分を奮起させるため、頬を手でぺちりと呑く。

すう～っと息を吸い込み、お腹の底から大きな声を出した。

「こ～りっしゃいませ～！ クリスマスにケーキはいかがでしようか
～！」

やつと販売員らしい声が出せた茜はほつとする。

伊達にテニス部で鍛えていたわけではない。その気があれば声は出せるのだ。

すると、向かいからも威勢の良い声が聞こえてきた。

「こ～りっしゃいませ～！！クリスマスに美味しいケーキはいかがで
しょ～つか～！」

最高級の生クリームと卵を使用した当店自慢のケーキで～じやれこま
す～～！」

茜以上のよく通る声。

あちらもその気があれば声は出せたらしい。

驚いて向かいの男性店員を見ると、茜の視線に気が付き、ニヤリと笑った。

どうやら密を呼び込む声は自分の勝ちだと思つているらしく。

茜はムッとした。

別に競つているわけではないが、馬鹿にしているかのような笑みは面白くない。

そっちがその気なら私だつて・・・！

見てらっしゃい、アンタ以上に密を呼び込んでケーキを売つてや
るんだから！

「こ～りっしゃいませ～！当店のケーキは情報誌でも紹介された確かな
品質と御味。

貴方のクリスマスをより一層素晴らしいものにする自信がござります～！」

『情報誌で紹介された』といつ売り言葉に通りかかった人が足を止める。

世間はこういったメディア系に弱いことを茜は知っていたのだ。紹介されたのは全国紙ではなく一部地域だけの地方情報誌だが、それでも嘘は言つてない。

「情報誌で紹介された、ってホント？」

茜の声に立ち止まつた女性の一人が茜に声をかけた。

「ハイ！ 当店が自信を持つてお贈りするケーキでござります。ふわふわのスポンジ、品の良い生クリーム、今朝取れたばかりの苺。

そしてクリスマス限定の小さなブーケもサービスでおつけしております！」

「いいわね、一つ頂戴！」

「ありがとうございます～！」

女性は花やおまけに弱い。無論、茜はソレを知つていての宣伝だ。

一人の客をキツカケに次々と客がやってきた。

ちらりと向かいの洋菓子店を見れば、客はほとんどいない。

男性店員のギリギリといつ歯ぎしりが今にも聞こえてきそうだ。

ふふん、ど～よ？ 私の実力は？

私を馬鹿にしたことを後悔するがいいわ～！

茜はほくそ笑んだ。勝った！と思つた茜だが。

「こりひしゃ いませー、当店自慢の最高級のケーキはいかがでしょ
うかー！」

男性店員の威勢の良い、爽やかな声が辺りに響いた。

そんな普通の宣伝で客が来るわけないでしょ？まったく、男つて
のはコレだからダメなのよ・・・。

と小馬鹿にした茜であつたが、それが間違つてゐるにすぐ気が付いた。

向かいの男性店員は爽やかな最高級のスマイルを浮かべている。
目を凝らしてよく見てみれば、結構なイケメン。

そのイケメンが最高級のスマイルを浮かべて客を呼び込んでくるの
だ。

しまつた・・・

オンナはコレに弱い。女性客をあつちに持つていかれりつ！

茜の悪い予感は的中し、女たちは吸い寄せられるように向かいの洋
菓子店に入つていつた。

気がつけば、茜の前には誰もいない。

女性たちに囲まれて接客をこなす向かいの男性店員は、茜をちらつ
と見るとふふんとせせら笑つた。

くつ・・・！ いいわ、こちにはオンナの武器があるわつ！

茜は周囲をぐるりと見渡し、仕事帰りと思われる、人の良さそうな中年の男性に声をかける。

「お客様？ クリスマスにケーキはいかがでしょう？
当店のケーキは雑誌で紹介されたほどの人気のケーキ。
そのケーキと小さなブーケを持って帰れば、御自身でお待ちの奥様やお嬢様がさぞかしお喜びになりますよ。
お父様の株があがること間違いございませんっ！」

「そ、そつかね？ ジャあ、一つもらおうかな・・・」

茜の熱弁にまるめ込まれた中年男性がケーキを買つていった。

「当店のケーキはサービスでブーケをお付けしております！
女性の方に喜ばれますよ～！」

一ヶ口りと微笑みながら、更に叩き込むようにケーキの宣伝をする茜。

続々と中年を中心に男性たちが茜の前にやってきた。

オヤジ、大量ゲッシツト！

茜は手早く接客しながら、密かにガツツポーズ。向かいを見れば男性店員はこちらを睨んでいる。

絶対に負けないからねっ！

鼻息荒く田線で向かいの男性店員に挑戦状を叩きつける。

受けたとうじやないか・・・！

あちらの男性店員の心の声が聞こえてくるよ！だ。

勝つのはどっちだつ！？

外は暗くなり始めていた。

茜は初めに考えていた以上のケーキを売っていた。
そろそろ店内の在庫も切れ始め、茜の仕事にも終わりが近づいてい
る。

向かいの洋菓子店の男性店員も似たようなものだらう。

「」で一気に攻めてやるつ！

茜はそう決意すると、すぐさま店長に相談し、了解を得た。
すう～と息を吸い込むと、お腹の底から声を出す。

「こ～りつしゃいませ～！　当店のケーキ、只今より30%引きで～
ざこまち～！」

通つて行く人たちの足が止まる。

30%引き、30%引きと咳きながら、わらわらと人が寄つてくる。
割引に世の人は弱いし、店側としても割引しても可能な限り売つ
てしまいたい。

茜の作戦通り、客たちは次々とケーキを買つていく。

「ただいまから当店のケーキは40%引きです～」の機会にいかが
でしようか～！」

向かいから男性店員の声。

あ、真似したっ・・・！

密にとつては少しでも安いほうが有り難いので、密たちは向かいの店に小走りで去つていぐ。

よくも・・・！

いいわ、あとはいかに上手く残ったケーキを売りさばくかよっ！

「当店のケーキ、只今30%引きでござります。お花のブーケもお付けしております！」

茜は気合を入れて、より一層大きな声をあげる。

「当店自慢の最高級ケーキが40%引き。皆様、いかがでしようか～！」

向かいの男性店員も茜に負けじと大声で道行く人に声をかける。

二人の見事なまでの攻防戦は続く。

やがて辺りはすっかり暗くなり、茜がバイトしている洋菓子店も閉店となつた。

やる気のなさそうな茜が一転して、すごい勢いでケーキを売つてくれたので店長はすこぶる「機嫌だ。

約束通り、わずかばかりであるが臨時のボーナスをつけると直つてくれた。

気分良く退店する茜。

しかし、茜にはまだやることが残つていた。

それは・・・

向かいの男性店員と比べて、どうがよつ多くのケーキを売ったか確認するためだ。

あちらも同じ気持ちで、向こうからあの男性店員がこちらにむかつて歩いてくる。

一人は至近距離まで近づき、皿を叩かせると匂いに立くなづいた。

「私は53ホールのケーキを売ったわ。あなたは?」

「べつに、俺は52だ。悔しいけど負けたな・・・」

「やつた、私の勝ちね!・
・・・って言いたいけど、一個だけじゃね。あなたもすくつかつたじゃない」

「たとえ一個でも負けは負けだ。潔く負けを認めよ」

両手を合わせると、ぱりぱりともなく笑い出した。

「俺達、クリスマスに何熱くなつたんだろ?」

「でも、その熱のおかげでこんなに寒くても寒さが辛くなかつたわ」

「あ、それは俺も。最初は寒くてやつてられないと想つたのに。途中からなんだか楽しかつたよ」

「わたしも・・・!」

寒さ答える夜のクリスマス。

しかし、二人は少しも寒くなかった。

「キミの勝利を祝して、今から飲みに行かない？」

「いいわね、貴方の健闘を讃えて飲みに行きましょう」

二人は自然と体を寄せ合い、歩き出した。

ふと茜が目を上げれば、路上のライトアップに可愛らしいサンタクロースのイルミネーション。

こんなクリスマスも悪くないでしょ？

メリークリスマス！

サンタクロースからそんな声が聞こえた気がした。

そうね、こんな始まりも悪くない。

これからどうなるかは私次第だけれど・・・。

私、頑張るわ。今日みたいにね。

「どうかした？

あ、そうそう、キミの名前を聞いてなかつたな。

俺は佐々木隆也。よろしく…」

「私は沢田茜。よろしくねっ！」

茜の元気の良い声がクリスマスの夜に響いた。

{

完

}

(後書き)

以前経験したクリスマスケーキの販売の記憶を元に創作しました。
茜と同じように他店の子と争うように売っていましたね。
ただ、他店の子は女の子でしたので、茜のようなロマンスの予感はありませんでしたが（笑）
よろしければ感想をお聞かせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952z/>

クリスマスケーキ交響曲

2011年12月25日16時52分発行